

## デュマ「銃士三部作」を読む—歴史と文学的想像力 (2) 『二十年後』

### Reading Dumas' Trilogy of Musketeers (2)

矢橋 透

Toru YABASE

かの『三銃士』に始まる長大な「銃士三部作」の内容を要約紹介しながら、史実と文学的創造の関係をことほぐし、そこで展開される歴史像の特徴を明らかにし、その小説としての魅力に迫り、さらにはその大衆文化史における大きな存在感を明らかにしようとする我々の試み。二回目の今回は、三部作の第二作『二十年後』を採りあげる(1)。

#### 『二十年後』の作品世界

この作品はその名のとおり、前作でダルタニャンと三銃士が、宰相リシュリューの意図にことごとく反抗しながらも、その並々ならぬ力量を評価され、ダルタニャンが国王付き近衛銃士隊の副隊長に任命された一六二八年の二十年後である、一六四八年に幕を開ける。この年は、ヨーロッパ近世史において、もっとも重要な意味を持つ年号のひとつであり、長かった三十年戦争が終了しウェストファリア条約が締結され、ヨーロッパが新たな勢力地図の時代に入るとともに、英仏両国において、それぞれフロンドの乱と清教徒革命という、旧体制にとっての最大の危機が訪れた。そして作品は、そうした政治的事件をまさに中心的主題としつつ展開していくことになるのである。

作品の冒頭は、宰相マザランが迫りくる反乱の予兆に怯えながら、ひとり自室で状況を分析している場面を映す。リシュリューとルイー三世が死んで五年あまり、まだ幼いルイー四世の摂政となった王太后アンヌ・ドートリッシュの最高補佐官であるとともに、個人的に彼女と親密な関係にあるマザランは、まさにフランスの政治的頂点にいるわけだが、イタリア人である彼を敵視する大貴族や、増税にあえぐ民衆の不満は日増しに増大しており、小心な彼は不安に慄きつづけているのである。そんななか宰相は、都市の様子を見に行っただけの同行した銃士隊副隊長の沉着冷静な仕事ぶりに強く印象づけられる。周囲の者に聞けば、その男は二〇年ほどまえには華々しい活躍で宮廷とパリの耳目を引きつけていたのだが、最近話題になることもなく職業軍人としての仕事を黙々とこなしているとのこと。自分の手足となり、この難局を乗り越えさせてくれる人材をなんとしても手に入れたいマザランは、彼と面談をすることにする。南仏ガスコーニュ出身のその男は、かつて彼と一心同体であった三人の仲間とともに行動するのであれば、いかなる難局といえどもものともしないと豪語する。こうして宰相の命のもと、ダルタニャンの、最近音信も途絶えている三人のかつての銃士探しの旅が始まることになる。

最初ダルタニャンは、アラミス——現在は僧籍につき、デルプレー神父と名っている——を訪ねる。神父は、僧坊に剣をずらりと並べ、政治にも恋愛にも以前にも増して色気がありそうであったが、マザランの名を聞くととたんに顔をしかめる。ダルタニャンははやばやに退散すると見せかけ、アラミスの行動を窺うと、あんのじょう彼は、いまは反マザラン派の大立者ロングヴィル公爵夫人とねんごろになっており、宰相にたいする陰謀に参画している様子。銃士隊副隊長は、かつての同僚がすでに政治的立場を分かってしまったことに慨嘆しながら、その地を去る。つぎはポルトス。デュ・ヴァロン殿は、現在は裕福だった妻が亡くなり、その財産と広大な領地を手にいれ、田舎の殿様の豪勢な

暮らしをしている。だが彼には、唯一不満がある。爵位を持たないので、近隣の大貴族たちに相手にされないのだ。ダルタニャンが、マザランに仕え手柄を立てれば必ずや立派な爵位が手に入るとおだてると、人のいい大男はたちまち話に乗ってくる。最後はアトス。彼は父祖伝来のラ・フェールの領地を相続しそこで暮らしているのだが、じつはダルタニャンは、尊敬する旧友との再会を待ち望むとともに恐れてもいた。というのも、大酒飲みだったアトスが寄る年波もあり、すっかり耄碌しているのではないかと気遣っていたのである。ところがあにはからんや、ラ・フェール伯爵は若々しく、見事に領地を切り盛りし近隣の尊敬を集めており、しかもラウルことブラジュロンヌ子爵という養子を大切に育て上げていた（この子は、じつはアトスがシュヴルーズ夫人——かつてアンヌ王妃の側近であり、アラミスの恋人でもあった——と偶然一夜をともにしたさいにできた実子であり、父はそのことを子供に秘密にしている）。ふたりの友人は再会を心から喜びあうが、ダルタニャンが懸案を持ち出すと、伯爵もマザランの高邁さを欠いた政治には憤懣を抱いており、取りつく島もない。ここにかつて一心同体を誇った四銃士は、完全に政治的にたもとを分かってしまった。ダルタニャンは重い心を抱えながらパリへの帰路を辿ることになる。

実際アトスとアラミスは、反マザラン派の急先鋒であり、ある重要な計略を推進していた。それは、アンリ四世の庶子系の孫にあたり、いまはその反宮廷的態度により、王太后とマザランによってヴァンセンヌ牢獄に収監されているボーフォール公を脱獄させることである。アトスの従者であるグリモーが、牢番としてヴァンセンヌに送り込まれ、そこで管理責任者の信用を獲得し、ある日ままと公爵を脱出させることに成功する。ボーフォール脱獄の報を受けたマザランは、すぐさまいまよりも信頼する配下であるダルタニャンとポルトスにあとを追わせる。壮絶な追跡ののち、ついにふたりは脱走者に追いつくが、反マザラン派の一团に取り囲まれてしまう。あわや玉砕のというところで、一团のなかにいたアトスとアラミスが旧友ふたりを認めて保護し、パリへと帰す。その後アトスの提案で首都の新王宮まえで落ち合った四人のかつての友は、口論ののち、あわや決闘かというところまで行くが、アトスが自らの剣を折り、今後永久に友にたいし剣を抜くことはしないと誓う。他の者たちも、アトスのこの行動に感動して抱き合い、政治的立場を異にしても永遠の友情を保ち続けることを誓いあう。

さてその後アトスは、いまや成人に達したラウルが軍人として初陣に臨むのを見送る。子爵はやはり名門貴族の出であるギーシュ伯爵と友情を結び、三十年戦争の最後の山場である対スペインのランの戦いで、コンデ大公の指揮のもと勲功を挙げる。だが戦場に赴くとちゅうで、彼は奇妙な出来事を経験する。スペイン兵に襲われ重傷を負った男を宿屋に運び、最後の秘跡を受けさせるために、不気味な印象を与える旅の修道僧を連れてきたのだが、僧が瀕死の男を殺して逃亡したのだ。その奇妙な事件は、グリモー（彼はボーフォール公の脱獄を成功させたのち、アトスによってラウルのもとに従者として送られていた）によって解明される。殺された男は、『三銃士』の最終部分で、妖婦ミレディーの首をはねたベチューヌの死刑執行人であり、怪僧はなんと、ミレディーが残した遺児で、いまや復讐の鬼と化した彼——モードントというのがその名である——は、母の命と自らが相続すべき爵位・財産を奪った人間をつぎつぎと血祭りにあげようとしているというのだ。四人のかつての銃士は、いまや政治的動乱に加えて、共通の恐ろしい敵を相手にすることとなった。

その間にも、パリの民衆のマザランと宮廷にたいする不満は日ごとに高まっており、ひとつの事件をきっかけに、その後長くフランス全土を揺るがすことになるフロンドの乱の火ぶたが切って起こされることになる。ランの戦いでコンデ公の大勝利を祝う祝賀日の朝、宮廷は、長く戦費捻出のための増税に反対し、民衆の人気を得てきた高等法院の参事官ブルッセルの逮捕という強硬策を執行しようとする。ところがシテ島にあるブルッセルの家に警吏が入り込もうとしたとき、戦勝式のためノートルダム寺院まえに集まっていた民衆が暴動を始め、あわやブルッセルを移送する馬車が乗っ取られそうになるが、いあわせたダルタニャンとラウルの獅子奮迅の活躍により、なんとか護送は完了する。

しかし民衆の怒りは留まるところを知らず、ここで野心家のパリ大司教補レスが介入することで、パリは一夜にして、反乱派の牙城の様相を呈することになる。レスは、ロシュフォール伯爵(『三銃士』で、初めダルタニャンの宿敵であったが結末では友人となった彼は、マザランにより長くバスチーユ牢獄に監禁されていたため、反宮廷派に転じていた)によって不平貴族を、プランシェ(ダルタニャンの従僕であった彼は、その後ロンバール通りで菓子屋を経営している)によってプチブルを、謎の男マイヤール(サン＝トゥスターシュ教会前で物乞いをする身分でありながら、じつはパリじゅうの乞食たちを統御する力を持っている)によって無産階級を、それぞれ反乱のために組織化し、バリケードを築かせ武装化させたのだ。こうして翌朝ルーヴル宮に乗り込んだ大司教補は、アンヌ王太后とマザランを脅し、ブルッセルの解放を勝ち取り、一躍パリの王のような存在となる。

だが、民衆に屈辱を味あわされ怒りに震えた太后は、ここで起死回生の策に出る。コンデ大公と示し合わせた彼女は、夜にまぎれ反乱軍に押えられたパリを脱出し、近郊のサン＝ジェルマン離宮に逃れて、外側からパリを攻め落とす作戦を考えつく。この宮廷の集団夜逃げの実行を任されたのが、いまや信頼厚い銃士隊副隊長であり、ダルタニャンとポルトスは、数多の困難を乗り越え(出発直前に宮廷のパリ脱出の噂が流れ、プランシェを初めとする民衆が居住を確認するため、幼いルイ十四世の寝室にまで入り込んできたり、副隊長の機転で、他ならぬ敵側の長であるレスの馬車を使って、国王と太后を逃亡させたり……)、移送作戦に成功する。しかし、こうして勲功を挙げた銃士たちには、まさに一刻も休む間は与えられなかった。マザランの命により、ふたりはクロムウェルへの親書を持って、これまた内乱の真っ最中であるイギリスへと乗り込むことになる。そしてかの地で、彼らはなんと、アトスとアラミス、またモードントと宿命的な邂逅を果たすのである。

というのも、アトスたちは、パリに亡命していたイギリス国王チャールズ一世の妃アンリエットに懇願されて、清教徒勢力に追い詰められつつある国王を救うべく、一足早くイギリスへと乗り込んでいたのだ。アンリエットは、名君と謳われたフランス国王アンリ四世の娘にあたり、ふたりの元銃士はその切望を無視するわけにはいかなかった。そしてモードントとは言えば、彼はなんと、清教徒の長オリヴァー・クロムウェルの側近であり、かつて母ミレディーの遺産を没収し爵位を奪った伯父のウィンテル伯爵とチャールズ王にたいし、革命の名のもとに復讐を果たそうとしていたのである。さてチャールズ一世は、ニューカッスル近郊で、味方と頼んだスコットランド軍の裏切りにより、ついに清教徒軍に捕えられる。その捕獲作戦の先頭に立っていたモードントは、その場で国王の側近であるウィンター卿を射殺する。そしてその毒牙をアトスとアラミスにも向けようとしたまさにそのとき、ダルタニャンとポルトスが、他人のふりをしてふたりの身柄を確保する。マザランからクロムウェルへの親書(それは、フランスがイギリスの内乱に関し干渉しないことを約すものであったのだが)を届けたあと、彼らは清教徒軍に同行していたのだ。ダルタニャンはアトスらに、国王がすでに捕えられたいま、ただちに危険なイギリスを後に帰国しようと説得するのだが、国王派のふたりは、断固最後までチャールズにつき従うと明言する。ダルタニャンとポルトスも、友情のために行動をともにすることを誓い、ここに国王解放と、モードントとの対決のための命がけの闘いの火ぶたが切られる。

チャールズをロンドンに護送する過程で、モードントによって救出作戦をもう一步のところまで阻まれた四人の元銃士は、首都でも国王の処刑日前日に大胆な計略を実行する。彼らはロンドンの死刑執行人を買収して行方をくらませ、そのあいだに処刑台に隠れるようにして牢獄に通じる横穴を掘り国王を脱出させようとする。ところが当日、なんと仮面に顔を隠した代理の死刑執行人が登場し、処刑は予定通り行われることになる。チャールズは、ひそかに処刑台のしたに隠れたアトスにこれまでの労をねぎらう言葉をかけ、「覚えておれ<sup>リメンバー</sup>」という謎めいた言葉を残し断頭台の露と消える。

仮面の死刑執行人は、モードントその人であった。その事実を知った四人のフランス人は、隠れ家にいた彼の不意をつき追いつめるが、ぎりぎりのところで隠し戸から逃亡される。これ以上イギリスに留まることは命取りだと判断した元銃士たち(と彼らの従僕)は、かねてから用意させてあった稲

妻号という船で英仏海峡を渡ろうとする。しかしその船は、すでにモードントによって船長がすり替えられており、船底には爆薬が仕掛けられていた。ミレディーの息子は、夜中フランス人たちが寝静まったあいだに、爆薬に着火し、自らは別の小舟で脱出するはずなのだ。しかし、つねに冷静なアトスの従僕グリモーが、火薬が積まれていることに気づく。フランス人一行は、モードントの先回りをして、爆薬に着火し、自らはボートへと移る。稲妻号は、轟音と閃光とともに大海の藻屑と消える。だがモードントは、一瞬早く海に飛び込み一命を取り留め、命乞いをするふりをして、母の死にもっとも関わったアトスを海中に引き込み、死の道連れにしようとする。あいついで水中に沈んでいくふたり……しかし一瞬ののちアトスが水面に姿を見せる。彼は溺れるすんぜん、短刀で元妻の息子の命を奪ったのだ。ここについて、「銃士三部作」でももっとも劇的と思われる清教徒革命とミレディーの亡霊との対決が終わりを告げる。無事フランスの港町に到着した一行は、慎重に二手に分かれてパリを目指すことにする。というのも、フランス宮廷の政策は、イギリスの内政への不干渉であり、それに反した四人は——とくにマザラン配下のダルタニャンとポルトスは——国家背任的行為をしたことになるからである。

アトスとアラミスがパリに着くと、フロンドの乱たけなわであり、レスやボーフォールをはじめとするフロンド派の大物とマザランが裏工作を行いつつ、王軍とパリ市民軍の戦闘が続いていた。パリ郊外のシャラントンでは大規模な戦闘が起こり、そこでは王軍が勝利を収める。その後アトスらは、ダルタニャンとポルトスがピカルディ街道で逮捕され、マザランの邸宅のあるリュエイユに監禁されたことを知る。ここでアトスとアラミスは、友人たちの解放を見ざし——互いの性格に見合った——対照的な手段に訴えることになる。前者はアンヌ王太后に直接拝謁して、釈放を説得しようとし、後者は仲間を集めて、武力で奪還しようとするのである。サン＝ジェルマン・アン・レーに乗り込んだアトスは、かつて四人が命をかけてその名誉を守ったことをアンヌに思い出させ、ふたりの友の解放を懇願するが、かつての王妃の態度は冷たかった。アトスは部屋を出るやいなや逮捕され、彼もまた友人が収監されているリュエイユへと護送される。

さてリュエイユでは、アトスが彼らと同じ屋敷に収監されたという知らせを聞いたダルタニャンとポルトスが、大胆な作戦を執行しようとしていた。牢番のスイス兵を手もなく捕えたふたりは、その制服を着込んで、マザランがアトスに会見に行くのに同行し、そこで旧友との再会の機を得るとともに、なんとマザランを誘拐する。そして、手下とともにせ参じたアラミスをも伴い、ポルトスの領地であるピエールフォンに赴き一国の宰相を軟禁する。そこでかつての銃士たちは、宮廷と取引を行おうとするのである。ダルタニャンは、サン＝ジェルマンへと単身乗り込み、王太后に拝謁する。そこで彼は、四人の元銃士のイギリスでの行動を（アンリ四世の娘アンリエット王妃の懇願に報いようとしたという理由のもとに）正当化するとともに、フロンド派の要求、また彼ら仲間の個人的要求（ダルタニャンのための銃士隊長職、ポルトスのための男爵位、アラミスのためのロングヴィル夫人の息子への祝儀と領地の下賜〔この「息子」は、明らかにアラミスの落しだねということであろう〕）をのむことを、太后に要求する。アンヌは屈辱感に涙しつつ同意するが、ダルタニャンがかつての忠勤を思い起こさせ、また今後の永久の忠実を誓うと、あらためて彼ら元銃士たちの真価、鉄のような意志に感じ入り、なんの要求も出さなかったアトスにたいしても、息子ラウルを連隊長へと抜擢することを約束のだった。

『二十年後』の最終場面は、宮廷のパリ帰還である。宮廷とフロンド派のあいだに条約（リュエイユの和平）が結ばれたとは言え、国王一行を迎える首都には、喜びとともに不穏の空気が漂っていた（実際フロンドの乱はこののち第二の局面を迎え、さらに数年のあいだ続くことになるのである）。ダルタニャンとポルトスは、国王と皇太后また宰相を乗せた馬車の脇を固めていた。そのとき、反乱者の一群が突然襲撃をはじめ、大乱戦となるが、ふたりの銃士の活躍により、襲撃は鎮圧され、国王一行は無事ルーヴル宮へと帰還する。だが、ダルタニャンとポルトスの気はいまひとつ晴れない。彼ら

は戦闘のあいだ、ふたりの顔見しりを殺してしまったのだ。ダルタニャンが殺したのは、かつて宿敵であったがその後良き友となったロシュフォール伯爵であり（宮廷に深く遺恨を持った彼は、最後まで過激なフロンド派であり続けた）、ポルトスが殺したのは乞食の王マイヤールであったが、彼はその男がなんと、『三銃士』でダルタニャンの恋人コンスタンスの夫であったボナシュー氏であったことに気づいたのだった。かつてのパリのブルジョワは、リシュリューによって投獄されたのち、パリの闇世界に潜み宮廷への怨念をひそかに育んでいたのがあった。『二十年後』という作品は、こうした宿命の暗い一面を垣間見せながら、ついにその劇的展開を終息させることになる。

### 歴史的事件のなかの虚構の主人公たち

では初めに、『二十年後』という作品における史実と虚構の関係を考えてみよう。『三銃士』では、史実と虚構が混然一体化している点を指摘したが、歴史的イベントとしては、ラ・ロシュルの攻囲とバッキンガム公の暗殺しか描かれておらず、他はダルタニャンのパリへの上京と三銃士との遭遇にせよ、ダイヤの飾り緒事件にせよ、ミレディーとの葛藤にせよ、すべてが文学的創造によるものであった。ところが『二十年後』では、そのストーリーのほとんどが、フロンドの乱、清教徒革命、三十年戦争という歴史上の大事件に関わっており、その展開がほぼ忠実に追われているのである。フロンド関連で言えば、ボーフォール公のヴァンセンヌ脱獄に始まり、ブルッセルの逮捕に端を発するパリ民衆の蜂起とブルッセルの解放、そして宮廷のサン＝ジェルマンへの脱出、シャラントンの戦い、リュエイユの和平によるいわゆる「高等法院のフロンド（第一次フロンド）」の終結という流れ。清教徒革命で言えば、ニューカッスルにおけるチャールズ一世の捕囚から、ホワイトホールでの処刑に至る流れである。そしてこうした現実の歴史の流れのなかに、ダルタニャンやモードントといった虚構の登場人物たちがはめ込まれ、彼らがそうした歴史的イベントに深く関わっていたように描かれており、また四人の元銃士の対立と再融合、彼らのミレディーの息子との宿命の対決、第三部で大きな役割を果たすことになるラウルの登場といった主要な物語が、歴史との関連のなかで見事に描きつくされている。よって『三銃士』と、『二十年後』——そして第三部の『ブラジュロンヌ子爵』——では、その歴史小説としての在り方——史実と虚構の関係性——が変わっていることに注意すべきである。前者では、歴史的イベントと虚構のイベントが並列され、分量的には明らかに虚構が優位を占めているのにたいし、後者では、ほとんどを歴史的イベントが占めるが、そこに虚構の人物がはめ込まれることで、その内容にも変容が加えられている(2)。後者では、デュマの歴史小説の大きな特徴のひとつとされる、読者にたいする歴史教育的側面(3)が、強く表れるようになってきたとも考えられる。

### 歴史的主体の意識

それでは、こうした虚構の主人公たちが歴史的イベントに参画するというデュマの作品世界は、一九世紀の一般読者にどのような歴史像を与えていたのだろうか？ やや大げさな言い方をすれば、彼らはダルタニャンらが歴史的イベントのなかでまさに中心的な役割を果たすのを見、主人公と同一化して歴史を生きることで、いわば歴史における主体としての意識を獲得していたと考えられるのではなからうか。アンシャン・レジームにおける「王たちの歴史」——それはフランス革命によって、いわば断絶してしまったわけだが——の「こま」と思われていたものが、ダルタニャンたち下級貴族が主体的に歴史に参画しその流れを変えていく姿を見ることにより、自らの歴史として感じられてくる。たとえば、そうした効果がもっとも明瞭に感じられると思われるのは、結末近くのリュエイユの和平の場面であ

る。

「和平」は実際には、宮廷と高等法院のあいだでの基本的に妥協的な内容であったとされる。それは一六四九年三月に調印されたのだが、同年一月のイギリスでのチャールズ一世の処刑により、君主制擁護の立場にあった高等法院が王政にたいして敵対的な立場をとることに弱気になったため、マザランによって切り崩されたというのが、真実に近いようだ(4)。これを機に高等法院はフロンドの側から撤退し、その後は「貴族のフロンド(第二次フロンド)」へと状況は移ることになる。しかし『二十年後』では、和平条約が、ダルタニャンたちがマザランを捕囚し、アンヌ王太后にたいし、なかば強制的に調印させたように描き変えられており、いわば元銃士たちが宮廷とフロンド派(貴族・高等法院・民衆)の橋渡し役を果たしたかのような観を呈している。このあたり、『三銃士』を扱った部分でも言及したような、当時歴史小説に求められていた、「人民の歴史」を表象することで、革命によって断絶した国家としての歴史的アイデンティティを復興するというプランに、きわめてよく合致していると考えられる。『三銃士』でもダルタニャンらがりシュリュウと渡り合うことで、そうしたプランは部分的に実現されていたと思われるが、それはあくまで虚構的物語内でのことであり、『二十年後』では、実際の重要な歴史的事件が扱われているだけに、人民による歴史の主体的創出というイメージが、より明確に読者に伝わったと考えられるのである。

#### 「歴史異聞」——歴史冒険小説の誕生

さてここで、先ほど言及したリュエイユの和平の描写にも典型的に見られるような、歴史的事件に虚構の登場人物を登場させ、じつは事件はそうした人物たちの関与によるところがひじょうに大きい……とする「歴史異聞」手法に注目しておきたい。それは、『三銃士』でも、ミレディーがバッキンガム公殺害の陰の立役者であったという展開のうちすでに表れていたのだが、『二十年後』では、それが全面的に——ボーフォール公脱獄におけるアトスとアラミス、宮廷のサン＝ジェルマンへの脱出でのダルタニャンとポルトス、清教徒革命におけるモードントと四銃士(の攻防)、リュエイユの和平におけるダルタニャン——使われるに至っている。このようなある意味歴史の改ざんとも言える手法は、同時代のフランス歴史小説にはあまり見られないものであり、デュマの独創とまでは言えないまでも、彼がこうした手法の流布に最大の貢献をしたことは疑いない。それはこの後扱う『ブラジュロンヌ子爵』での「イギリス王政復古」でもきわめて大胆なかたちで使用されるのだが、その後一九世紀後半から二〇世紀にかけての歴史を扱う冒険小説や映画などのサブカルチャー的ジャンルにおいて、おおいに繁栄を見ることになる。文学史家のアラン・ヴァイヤンは、デュマの小説とくに「銃士三部作」を、歴史という現実的領域における「(近代的)奇跡」の創出という観点から、冒険小説の源流に位置づけ、ダルタニャンを「現代に至る冒険的ヒーローの大部分の原型」(5)と高く評価しているが、それも、以上のような「歴史異聞」による歴史の書き換えという観点からして、おおいに首肯できるところであろう。この手法は、「銃士三部作」の大衆文化史における大きな存在意義を証明する重要な要素なのである。

#### 「革命」の記憶

さて、『二十年後』という作品は、フロンドの乱と清教徒革命という一七世紀における仏英両国の王政の危機を扱っており、前者における、パリ大司教補レスの先導のもと、パリの街が一夜にしてパリケードと武器に覆われた反乱の牙城になる場面、また後者における、アトスらの努力も実らずチャー

ルズ王が斬首される場面は、全編でもとくに印象深い場面と言ってよいであろう。前者において、乞食の王マイヤールによって指揮された無産階級の人々が、都市の闇のなかから出沒し武装化する個所では、黒幕であるレス大司教補自身が、背筋が寒くなる思いがするように描かれている。

「大司教補はこれら暗闇で働く人びと、夜の労働者たちを、恐怖に近い気持で眺めていた。こうした汚らしい輩をその根城から狩り出してのはよいが、そのあとで果たして元の場所へ追い返す力があるだろうか？そのうちの一人が近づいてきたら、いそいで十字を切る覚悟だった。」

Gondy regardait ces hommes de l'obscurité, ces travailleurs nocturnes, avec une certaine épouvante; Il se demandait si, après avoir fait sortir toutes ces créatures immondes de leurs repaires, il aurait le pouvoir de les y faire rentrer. Quand quelqu'un de ces êtres s'approchait de lui, il était prêt à faire le signe de la croix. (6)

さて、こうした場面が持つ異様な迫真性は、作品の舞台から一世紀半ほどのちに出来し、デュマが作品を書いた時代にもいまだ生々しい記憶を残存させていたフランス革命（さらにはその後の作者自身も参画した七月革命）の記憶が重なっていることにもよるのではないだろうか。

さらに、『三銃士』から『二十年後』にかけて、「斬首のテーマ」が大きな意味を有していることにも注目したい。前者の最後でダルタニャンたちは、私的即席法廷での裁きを経て、フランスとフランドルの国境沿いで、つまりまさに法と国家の境界上で、悪女ミレディーを断首させた。この記憶は、『二十年後』に至っても、元銃士たちの心に重くのしかかっており、とくに四人中もっとも繊細で倫理的な人間であるアトスは、あれが正しい行為であったかとなんども自問している。そして現実的にも、そうした法の限界上での裁きの行為が、ミレディーの息子であるモードントによる復讐の連鎖——ベチューヌの死刑執行人、ウィンター卿の殺害——を引き起こし、最終的にはモードントによるチャールズ一世の「斬首」へとつながっていく。そしてアトスたち元銃士はと言えば、王の処刑を、全力を尽くして阻止しようとしたが果たせなかったのだ。ジャンヌ・バムは、銃士三部作が扱う一七世紀の歴史的事件と一九世紀史が微妙な対応関係を示しており、『二十年後』におけるアトスらのチャールズ王にたいする異常とも見える加担ぶりを、一七九三年のフランス国王ルイ一六世の「斬首」にたいする罪悪感の表れであると指摘している(7)が、我々としても、フロンドの乱での武装化したパリの情景などをも考え合わせると、『二十年後』という作品におけるフランス革命の影響の大きさを考えてみたい気になるのである。デュマ自身は、政治信条的には自由派＝共和派であったことが知られている（一方彼の作品自体は、あまり政治イデオロギー的な偏向を示さないと見なされている）が、国王（家族）の「斬首」という歴史的悲劇にたいする思いは、他の多くの同時代の作家同様複雑なものがあつたと考えられる(8)。『三銃士』と『二十年後』が書かれたのが、七月王政という立憲王政の時代であったことも想起したい。

#### 家族のいない銃士たち

ところで、さらにバムは、元銃士たちが奇妙に父親との関係を欠落させていることを指摘している(9)。ダルタニャンの場合、『三銃士』の冒頭で父親から剣と馬を譲り受ける（母からは軟膏を受け取る）ことがフラッシュバックで描かれるが、その後両親は三部作全編中で一度も登場しない。アトス、ポルトス、アラミスに関して言えば、完全に父や実家との関係を絶っているらしく、その言及は絶無である。またそれだけではなく、彼らは正嫡子をつくらない。ダルタニャンとポルトスには子供がいな。アラミスがアンヌ王太后にロングヴィル夫人の子供の名付け親になってくれるよう頼むの

は、それが自分とのあいだにできた子であることを暗示しているのだろうが、そうとはけっして明言されないし、もちろん嫡子として認知しているわけではない。もっとも奇妙なのはアトスの場合で、彼は前述のようにシュヴルーズ夫人との偶然的な一夜の逢瀬からラウルを授かるのだが、その愛する息子にたいし、自分が父であることを明かさないのだ。元銃士たちは通常の父子関係をかたくなに拒絶しているようにも見える。このことと、前項で指摘したような、フランス革命における象徴的父である国王の殺害とのあいだには、なんらかの関係があるのだろうか？

いや父親だけではなく、元銃士たちは妻にも家族にも事欠いている。ダルタニャンとアラミスは一度も妻をめぐったことがない（ふたりとも——とくに後者は——付き合う女性には不自由しないのだが）。アトスは若き日のミレディーとの不幸な結婚以降、一貫して女性一般にたいし嫌悪感を抱き続けた（10）し、ポルトスは公証人の後家と結婚していたが、それも短いあいだだけであった。

このように、主人公たちがほとんど家族関係というものを有していないことは、いかに彼らが基本的に戦士として孤独な人生を歩むよう強いられていたとはいえ、やはり少々異常な事態と考えられるのではないか。そしてその分、彼らは、ホモソーシャルな男たちの友情という自足的世界に生きているようにも見える。『三銃士』によってかくも世界に名をはせた四人の鉄の友情は、このように少し視点を変え、三部作全体に眼を凝らせば、不自然なものであるという印象も生じてくるのだ。このような事態はやはり、象徴的な父である国王を斬首し、その結果として父を頂点とする伝統的家族制度にも亀裂を生じさせたフランス革命後の、動乱の個（孤？）の時代というものを反映させているとも考えられるのではなからうか。作者のデュマ自身の人生も、銃士たちと似ていなくもないことを付け加えておこう（11）。

### 人生の味わい

『三銃士』は、四人の銃士たちの固い友情と祝祭的青春、そして若きダルタニャンの成長を描く青春教養小説であった。『二十年後』は、中年にさしかかった四人が、もともとあった個性と価値観の差異を際立たせ（ダルタニャンの職業軍人としての大いなる能力と誇り、そして現実的価値観、アトスの名門貴族ならではの正義と高潔さへの献身、ポルトスの富と爵位（と食）にたいする世俗的欲求、アラミスのいまひとつ方向性の定まらない野心と女性へのあくなき欲望）、そのため政治的立場も異にして決裂寸前までゆくが、それでもかつての友情の記憶によってふたたび結ばれ、互いに窮地を救いあうことでフロンドの乱と清教徒革命とを乗り越えるという物語であり、そこには二十年という時間的経過がもたらす様々な人生のニュアンスが描かれ、三部作の有名な第一作とは異なった味わい深い魅力が充溢している。

アンヌ王太后にしても、『三銃士』ではリシュリューによって迫害にあううら若き恋するヒロインであったのが、『二十年後』ではリシュリューとルイー三世亡きあと宮廷に君臨し、いまや倨豪と弱さ（彼女は公的にも私的にも、もっとも肝要なところではマザランに操縦されている）を同居させた複雑な性格を見せる。彼女はかつて自らのために献身してくれた銃士たちにたいし、冷酷な態度を見せるかと思えば、突然慙愧の念に捉われ、女性らしい大きな感情の起伏を見せる。

また人生の皮肉というか、宿命のようなものを強く感じさせる人物たちもいた。ミレディーの息子モードントは、母の復讐のため、仇をつぎつぎと手につけて、最後に最大の敵である銃士たちを爆薬で一網打尽にしようとしながら、母の死にもっとも深く関与したアトスによって返り討ちにあい、母同様国境上での非業の死を遂げる。ロシュフォールは、『三銃士』ではダルタニャンの宿敵であったのが、その後友情を結ぶも、最後はやはり銃士の手によって果てることになる。またあらすじのところでも書いたように、マイヤール、かつてのボナシュー氏は、パリの人のいいブルジョワから首都の闇



世界の王へという、もっとも激しい人生の転変を経て、最後はかつて因縁浅からぬ仲であった銃士のひとりによって惨殺される。デュマが、脇役に過ぎないこの人物にたいし、『三銃士』と『二十年後』でともに最後の最後に言及を行っているのは、この人物が人生の激変、宿命、時の力といったものをもっとも印象深く表現していることを強調せんが故のことであろう。

このように、『二十年後』という作品は、表題にも表れているように『三銃士』からの時間的経過をある意味で主題化することにより、運動性をその本質としていた『三銃士』にたいし、時間性のもたらず「古色」(12)という、新たな魅力を連作に加えていると言えるのである。

以上、銃士三部作の第二部『二十年後』の物語を紹介し、その歴史像と文学的魅力について論じてきた。そこでは、虚構の物語が優位を占めていた『三銃士』とは異なり、現実の歴史的大事件が中心的に扱われ、そこに虚構の登場人物たちが深く関与するさまが描かれることで、読者にたいし、歴史教育的配慮がなされるとともに、国民国家の歴史における主体としての意識を与えていると考えられた。また、そこで使用された「歴史異聞」とも言うべき手法は、歴史冒険小説というジャンルの創出に結びつき、さらには映画などの他ジャンルにも流れ込むことで、サブカルチャー的文化史において端倪すべからざる影響を与えることになる。さらに『二十年後』には、フランス革命の——時代を逆行した——影響が存在し、それが迫真性に富んだ場面を作り出すとともに、銃士たちの人生にも独特の陰影を与えていることが注目された。そして最後に、ここでは第一部からの時間的経過そのものが主題化されることにより、人生の複雑な味わいという、『三銃士』の青春の輝きとは異なった魅力を持った作品世界が展開されていることを指摘した。

このように、『二十年後』という作品は、『三銃士』の明るい活劇的爽快さとはずいぶん異なる世界を提示している。その傾向は、第三部においてさらに強まることになるだろう。次回はその第三部を扱うが、それは第一部と第二部を合わせたよりもさらに長大であり、それを一挙に扱うことは難しく、ふたつの部分に分けて論じていくことになるだろう。

## 註

(1) 『二十年後』のテキストと翻訳は、以下を参照。Dumas, *Les Trois Mousquetaires, Vingt ans après*, Gallimard, Pléiade, 1962. アレクサンドル・デュマ、『ダルクニャン物語』第三・四・五巻、「我は王軍、友は叛軍」「謎の修道僧」「復讐鬼」(鈴木力衛訳)、講談社文庫、一九七五年。

(2) 批評家のジャン・チボードーは、『三銃士』『二十年後』『ブラジュロンヌ子爵』という三部作の作品世界を、それぞれフィクション・秘史 (*histoire secrète*)・歴史と形容し、最後の『ブラジュロンヌ』で、ルイー四世の登場とともに大文字の「歴史」が顕現するとしている。Jean Thibaudou, 《*Les Trois Mousquetaires suivi de Vingt ans après et du Vicomte de Bragelonne, ou une disparition de la fiction dans le texte historique*》, *Europe*, no.490-491, 1970, pp.59-75.

(3) C f. 小倉孝誠、『歴史と表象——近代フランスの歴史小説を読む』、新曜社、一九九七年、———四頁。

(4) C f. 阿河雄二郎、「ルイ十四世とマザラン」、柴田・樺山・福井編、世界歴史大系『フランス史』二、山川出版社、一九九六年、第四章、一八五ページ。

(5) Alain Vaillant, *Histoire de la littérature française du XIX<sup>e</sup> siècle*, Nathan, 1998, pp.179-183.

(6) 前掲鈴木力衛訳講談社文庫版、第四巻、二五一頁。Dumas, *op. cit.* (Pléiade), p.1166.

(7) Jeanne Bem, 《D'Artanyan, et après——Lecture symbolique et historique de la "trilogie" de Dumas》, *Littérature*, no. 22, 1976, pp13-29.

(8) 清教徒革命とフランス革命のあいだには、斧による斬首からギロチンの導入という、処刑方法上の革新があったわけだが。イギリスの歴史家ドリダ・ウートラムは、ギロチンの使用により、処刑の迅速性が格段に上がるとともに、罪人とそれを見る観客のあいだの感情的・倫理的交流が失われたことを指摘している。だが斧による断首の時代である『二十年後』においては、チャールズ一世とアトスら観客のあいだには、十二分の精神的交流が行われていると言える。C f. ウートラム、『フランス革命と身体——性差・階級・政治文化』（高木勇夫訳）、平凡社、一九九三年、第七章「ギロチン・霊魂・処刑を見つめる観衆」。

(9) Bem, ar. cit., pp.20-21.

(10) ピエール・トラヌエは、こうしたミソジニー的傾向はたんにアトス個人に認められるものではなく、銃士三部作全体にわたって見られるとし、『三銃士』でのミレディーの悪魔的描写が、『ブラジュロンヌ子爵』ではアンヌ王太后やシュヴルーズ夫人にまで拡大し、銃士たちが忌避してきた悪魔的な女性のイメージが回帰してくることを指摘している。Pierre Tranouez, 《Cave filium!—Étude du cycle des Mousquetaires》, *Poétique*, vol.71, 1987, pp.321-331.

(11) デュマは周知のように、生涯にわたり数多の女性と浮名を流したが、結婚は一度だけそれも短期間に終わるものであった。また有名な小説家になる同名の息子を、父は生後相当の年が経過してから嫡子として認めるのだが、その母を正式の妻として認知しなかった。息子はそうした母にたいする父の仕打ちに反発し、父子の関係は相当ぎくしゃくしたものとなった。『椿姫』の作者は自らの文学を、社会的弱者である女性への共感と道徳的断罪という、相反する身振りのうちに形成することになる。このあたりのいきさつは、父子ふたりのアレクサンドル・デュマの生涯を扱った、以下のアンドレ・モーロワの伝記に詳しい。モーロワ、『アレクサンドル・デュマ』（菊池映二訳）、筑摩書房、一九七一。

(12) Jean-Yves Tadié, *Le Roman d'aventures*, PUF, 1996, p.68.